

ウンランは東アジアからロシアにかけての北方域を中心に分布する海浜植物で、日本国内では北海道や本州の日本海沿岸でよくみられます(写真1)。太平洋沿岸でも北関東あたりまで南下していますが、それ以西では稀となります。兵庫県の瀬戸内海沿岸にも自生地がありますが、その規模は非常に小さく、県のレッドデータブックでは最も絶滅のおそれの高いAランクに指定されています。地域の生物多様性の保全、また、ウンランの遺伝的多様性の保全という点から、瀬戸内海沿岸の自生地は重要と考えられます。そこでここでは、ウンランをジーンバンク事業の対象種とし、自生地のモニタリングや系統保存・試験植栽などを行っています。また、その生態的特性を明らかにするために、他地域での生育状況や種子発芽特性に関する調査・研究を進めています。

ウンランは厚い肉質の葉、地中を長く伸びる根など、砂浜・砂丘での生育に適した姿をしています。一方、草丈はそれほど大きくならないため、より背の高い植物がひしめく内陸側に分布を広げることは困難です。したがって、ウンランを保全するためには、その生育環境である砂浜・砂丘の開発を避けることが第一に必要です。また、その花のサイズ・形態から、ウンランはハナバチ類などによって花粉が運ばれる虫媒の植物と考えられます。栽培個体に袋をかけ、虫の訪花を遮断したところ、果実・種子(写真2)はつくられず、自動的な自家受粉・結実が起こりにくいことがわかりました。ウンランが種子によって分布を広げ、次世代に命をつないでいく(写真3)ためには、虫の訪花がおそらく必要であり、そのためにはウンランだけでなく、海浜植生や周辺の低木林を含めた生態系全体を保全していく必要があると考えられます。

ちなみにウンランは「海蘭」で、海辺に生えるランという意味ですが、ラン科の植物ではなく、オオバコ科の植物です。また、ウンランはウンラン属 *Linaria* の植物で、この属の分布の中心は地中海沿岸の地域にあります。

ウンラン属に含まれる国内の自生種はウンランしかありませんが、地中海沿岸を原産とする種やそれらをもとにつくられた園芸種が「リナリア」や「姫金魚草」の名前で流通しています。

黒田有寿茂(自然・環境再生研究部)



写真1 海岸砂地に生育するウンラン
地上茎は這い、斜めに立ち上がる。



写真2 ウンランの果実と種子
開いた果皮の間から黒色に熟した種子がみえる。

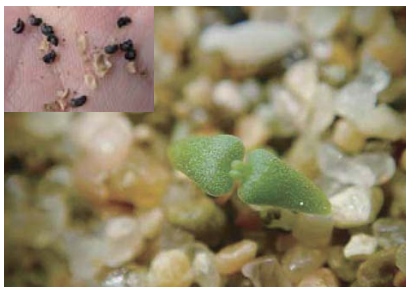


写真3 ウンランの種子(左上)と芽生え
三角形をした子葉の間から本葉が伸び始めている。

特集

ジーンバンク

~ひょうごの植物の多様性を
未来に伝える取り組み~



ガガブタ



ユウスゲ



エビネ



ミスミソウ



カワラサイコ